

寛永13年朝鮮通信使東照社参入の図「東照社縁起絵巻」(第四巻、日光東照宮宝物館蔵)



朝鮮国王(孝宗)親筆(日光山輪王寺蔵)

今から約400年前の江戸時代初期、徳川幕府の要請で朝鮮国王が「信(よしみ)を通(かわす)」「誠信」の使節を12回、毎回約500名派遣した「朝鮮通信使」。2017年10月、ユネスコは江戸時代の朝鮮通信使に関する記録を「記憶遺産」(世界の記憶)として登録決定したが、かれらが日光道中を通って日光を目指していたことはあまり知られていない。

特集 1
朝鮮通信使と
宇都宮

朝鮮通信使のはじまりと行路

朝鮮通信使(以下、「通信使」と称す)は、慶長12(1607)年の第1回から3回までは「回答兼刷還使」といい、豊臣秀吉により連れて来られた捕虜人を連れて帰るための使節であったが、第4回の寛永13(1636)年からの使節を「朝鮮通信使」と呼ぶようになった。通信使たち一行の行路は、まず漢城(現在のソウル)の昌徳宮で朝鮮国王から国書を託された三使(正使・副使・從事官)は釜山まで行き、潮待ち・風待ちの後、対馬に向けて出帆。対馬府中(厳原)に到着後、島主宗対馬守義成が接待をし、道中を警護先導した。志岐、藍島、赤間関から瀬戸内海を航行し、大坂で川御座船に乗換えて淀川を上り京都に入る。京都からは陸路東海道



朝鮮から贈られた三具足(東照宮奥宮)



大谷川にかかる神橋

日光を詣でた 朝鮮通信使

道中で目にした風景と今に伝わる「記憶」のかたち

日光朝鮮通信使研究会 柳原 一興

を進むが、途中の大河には舟橋が架けられ、將軍の行列並みの厚遇だった。対馬から約2カ月で江戸の宿舎馬喰町の本誓寺(現在、江東区清澄に移る)に入り、將軍への国書伝達を待った。

陽明門を初めて見た外国人

さて、通信使が日光を詣でたのは、第4回の寛永13年と第5回の寛永20(1643)年、第6回の明暦元(1655)年の三度である。ところで、通信使が日光を詣でたのは、どのような経緯からだったのだろうか？

寛永13年春、東照社(現在の日光東照宮)は1年5カ月で造替された。そこで計画されたのが、外国から家光の將軍襲職の慶賀を戴くことだった(大瀧晴子氏によると、計画したのは天海大僧正ではないかという)。その際、完成したばかりの東照社を通信使に見せるため、3代將軍家光が日光遊覧に招待したためだった。

さて、仁祖14(朝鮮暦、和暦は寛永13)年8月11日漢城府を出発した第4回通信使(正使「任統」、副使「金世謙」、從事官「黄屎」)の一行は、12月6日江戸に到着した(日付は旧暦、以下同)。本誓寺で通信使は、宗義成から予定に無い日光行きの招待を告げられた。途中の宿場で噂は聞こえていたが、正式に告げられると「国王の命が無い」との理由で断るも、交渉に入った宗義成の苦慮している姿を見て、やむなく承諾。宗義成は早速家光に報告し、12月13日に江戸城本丸で將

軍家光へ「朝鮮国王国書」が伝達され、家光より日光への招待を受けた。家光が謝辞を呈し、通信使は聘礼の膳を以って歓迎された。

日光行きは12月17日に決まり、家光への馬上才や典樂を奏する者たちを残し、一行217名は片道4泊5日の予定で真冬の東照社へ向けて出発した。

日光道中は通信使が東照社参詣を行う事を目論んで、総監督に老中松平信綱を任命。日光山巡見には松平正綱・秋元泰朝・板倉重昌が一行に先立って登山し、昼休所・宿泊所・沿道の民家や道の補修は準備万端整えられ、水打ちされた街道を一行は進んだ。

まず越ヶ谷で昼食、粕壁泊。18日は新栗橋で昼食。利根川の舟橋を渡り小山泊。19日は石橋で昼食、宇都宮泊。(第5回の寛永20年ともに宿泊場所が記載がない)20日は大津(現在の日光市大沢)で昼食、今市泊。

今市での宿所は、(板屋数百余間は、皆新造なり、材木は江戸から運搬して、費用は萬余両も要したという。此処は日光から一里余り離れた所であり、思うに二行の人馬が多いため、寺の中に入って泊まることができぬので、麦畑を平坦にして特別にこの館舎を設け、往来する時の宿泊する場所にしたという)〔正使日記〕。この客館は、通信使が2泊するためだけに造られ、帰った後は解体され地元材木が払下げられた。

21日は日の出とともに出立。神橋手前の「下乗石」で三使は屋轎(屋根のある輿)



【日光山大明神祭礼絵巻】(部分、個人蔵、栃木県立博物館寄託・写真提供)



朝鮮通信使来朝図 (栃木県立博物館蔵)

から下り、一行は徒歩で神橋を渡る(将軍社参・天皇勅使・山伏の峰入り以外は渡れない)。渡り終えると三使は平輪(屋根のない輿)に乗り、神橋周辺の杉の根の石鳥居手前で輿から下り徒歩で参進した。この石鳥居手前での様子が描かれているのが、ユネスコ記憶遺産(世界の記憶)リストに載った『東照社縁起絵巻』(第四巻(仮名本))と、紙本墨書きの真名本中巻で、双方とも通信使の漢詩が載せてある。いよいよ石鳥居を潜る時、「我が国の紅門(紅箭門(ホンサル門))のようだ」と記し、

柱に「筑前州(福岡)石二黒田筑前守長政」と刻んである銘文に気づき、通信使たちのここまでの苦勞と重ねて、日本の運搬技術に感嘆している。そして石鳥居から銅鳥居までは、表門・上中下神庫・神既舎・手水舎・輪蔵と建物の続くさまを、(幾千百問知らず、左右上下に連なる楼閣は、皆銅瓦で葺いてあり、棟の銅瓦が高く積まれていて)、と、銅の豊富さに驚いている。

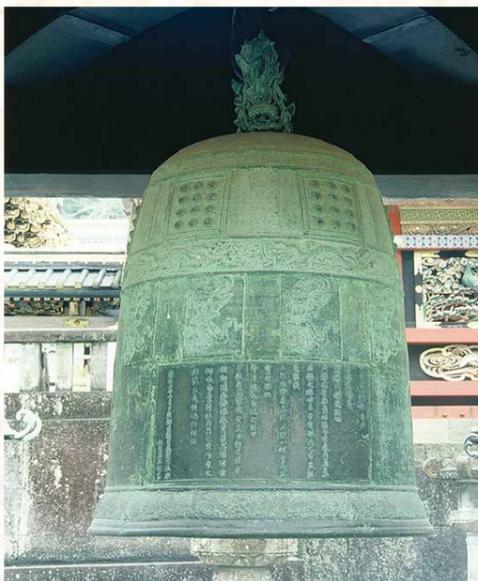
陽明門を絶賛している。次に宗義成が中門(唐門)から中に入るよう促すが、唐門前石段で小憩しているうちに風花が舞ってきたことを口実に辞退し、遂に日光寺(輪王寺の支院か)へ戻ってしまう。唐門内には拝殿があり、(寺後数十歩の所に別に一室を設ける也、権現の木像が安置されている)「(従事官日

記)。義成は家光から使節にすべてを見せるよう厳命されていたので、「木像」と記されていることから、本殿内御宮殿まで開扉したのではないかと考えられる。通信使はここで帰ってしまつたので遊覧とされている。しかし、後年の幕府の記録には「焼香拝礼」と体裁を整えている。

寛永20年の通信使と東照宮致祭

「致祭」とは儒教式の最も格式のある祭り、寛永20年の通信使に異例の要請をした。名目は前例のない將軍継嗣(家綱)誕生の慶賀のためであるが、家光と天海が当初から目論んでいたのは「日光山致祭」であった。東照社への進物は、朝鮮国王の親筆・国王祭文・臣下の詩・銅鐘・三具足・大藏經(版木散失したとの理由で拒否)等である。銅鐘・三具足については、朝鮮は銅を産出しないとの事で断るが、対馬より銅と錫を提供することで鑄造を約束した。

2月20日漢城府を發した通信使(正使「尹順之」、副使「趙綱」、従事官「申濡」)は、7月7日江戸馬喰町の本誓寺に到着。18日に江戸城で家光に国書を奉呈し公式行事を済ませた。22日に江戸を出発。総監督の老中阿部豊後守は先に出発し、松平正綱も街道点検のために先行した。「プロデューサー」天



寛永20年朝鮮国王寄進の銅鐘 (日光東照宮蔵)

海は、うれしさのあまり数日前に「国王親筆」を捧持し江戸を發したが、病には勝てず粕壁で他の僧(公海)によつて東照社へ捧持することとなった。天海は上野寛永寺に戻り看護を受けたが、10月2日に遷化した。行列は前回と同様に利根川を舟橋で渡り、小山泊・石橋昼休・宇都宮泊・徳次郎昼休・今市泊、宇都宮では(民家が極めて多く、五、六千戸(五、六百戸か?)にもなつた。守官輿平美作守が出て来て待つて居た)と記している。ただ、宿泊場所の記載はない。25日今市。新装の客館に泊。ここで訳官が阿部豊後守に「祭祀を行った後で祭文と幣帛は、焼くか理めるのが朝鮮式祭儀です」と告げると、豊後守は「国王の祭文は一国の慶事であり万世の宝として子孫に伝えたい」と焼かずに残すことの下承を得た。26日早朝に出立し、神橋手前で屋輪より下り歩いて渡り、山菅橋(神橋)の伝

説を聞くが誤解して聞いたようだ。平輪に乗換、途中の宿坊で休憩・正装し参道を進んだ。石鳥居前で下乗、宗義成の案内で参進。石鳥居・敷石・水盤に興味を寄せている。陽明門前に進むと建物が出ていたが(此処に我が国から送つた鐘を掛けるのだという)鐘は台の上に載せてあつたようだ。

(また門を一つ通つて行く)陽明門にはあまり関心を寄せていない。唐門を入ると仮拝殿が設えてあり、拝殿浜縁には国王親筆、臣下の詩篇、三具足(香炉・燭台・花瓶)等が並べられ、階下の高机の上には神酒や菓子盛られている。祭文の箱は拝殿に備われ、致祭が始まる。しかし、焼かずに残す承諾を得ていた祭文や詩篇、国王親筆等の進物は文化9年の火災で焼失し、朝鮮鐘だけが残つた。三具足は幕府神宝方で再造した物である。

明暦元年東照宮参拝・大猷院致祭

3代將軍家光が慶安4(1651)年に薨去し、4代家綱襲職の慶賀と、大猷院致祭を要請した。正使「趙珩」、副使「俞場」、従事官「南龍翼」は4月20日漢城府を發し、10月1日江戸に入った。前2回と同様に將軍社参並みの扱いで、神橋を渡り参詣した。10月15日宇都宮に入り、(粉河寺に宿す。人家八、九百戸で



大猷院にある朝鮮国王寄進の銅燈籠

頗る盛ん)と「(従事官日記)にある。粉河寺は県庁前の交差点、県総文センター、旧栃木会館一帯を境内とする大寺だつたが、明治年間に火災で焼失し宝蔵寺(大通り)に合併し廃寺となつた。16日今市客館泊。17日小雨の中、神橋に到着。前回同様輿から下り登橋。平輪に乗り長坂を登り、宿坊光樹坊に入り休憩し正装して東照宮に向かつた。東照宮に馬一匹と供物などをお供えし、仮拝殿で焼香拝礼を行ったが、境内の人揃えは前回同様であつた。拝礼が済むと次は大猷院で致祭のため、通信使は石鳥居下まで下がり、下新道を經由して向かつたが、幕府接待役や伶人たちは、急ぎわき道から大猷院へ向かい、所定の座について通信使を待たつた。致祭は東照宮と同じく、唐門内に仮拝殿を設え、拝殿前に進物を並べ国王祭文

「記憶」として残る絵巻

を声高に読み上げ焼香拝礼をした。このときの進物である「国王親筆」は現存し、ユネスコ記憶遺産(世界の記憶)リストに載つた。他にも銅燈籠一対、金欄、大花簾(ぎんこうりょう)、楽器などがある。

明暦の通信使に関しては、詳細な日記や幕府の記録、配置図などがあるので分かりやすい。また県内には通信使が描かれた大絵馬や、絵巻が残されている。しかし、360年前が最後の通信使となると、東京から日光までの住民にはほとんど忘れられている。一大イベントであつた「朝鮮通信使行列」は近郷近在から見物に来ていた。宇都宮二荒山神社の祭礼絵巻「日光山大明神祭礼絵巻」(慶応3年(1867))で、十三番池上町屋台に続く「同町練物唐人来行列之学ヒ」には朝鮮式の旗に「十三番池上町」と書いてあり、通信使の衣装を着た練物があつた。この頃には来なかつたが、良く揃えたものだと思ふ。近県では「土浦御祭礼之図」にも描かれてあり、江戸の山王祭、神田明神祭行列にもあつた。通信使が公式行事を行ったのは、江戸城と東照宮、大猷院の3カ所だつたが、江戸城は明暦3年に焼けてしまつたので、公式行事を行った場所が通信使の面影を今に伝えているのは日光のみである。通信使が訪れなくなつても、人々の記憶には在りし日のかれらの姿が鮮烈に残つていたことがよくわかる。